

## アレルギー性疾患

「アレルギー」という言葉は普段から日常的に使われており、「体に合わない」「拒否反応」といったイメージで使われることもありますが、正しくありません。

「アレルギー」とは「免疫反応に基づく生体に対する全身的または局所的な障害」を指します。これは通常であれば無害な物質に対して異常な免疫反応を起こすというものです。この反応を「アレルギー反応」といいます。



### 免疫反応とアレルギー反応

- アレルギー反応は免疫反応の一部です。
- 免疫とは体の防御機構で、外界からの異物の破壊・排除のための機能です。この異物に対する反応が免疫反応です。
- 通常であれば無害の物質に対して過剰に免疫系が作用することでアレルギー反応が起こります。
- このように体の免疫系が認識して、免疫系によるアレルギー反応を刺激する物質をアレルゲンといいます。
- 通常は抗原（アレルゲン）が体に侵入すると抗体が作られます。抗体が抗原に結合することで抗原（アレルゲン）に対処します。
- この反応がアレルギー反応となり、皮膚の発疹や腫れ、咳や喘息などの様々な形で症状として現れます。



### アレルギー反応の分類について

- アレルギー反応は大きく 4 つ（Ⅰ～Ⅳ型アレルギー）に分けられますが、一般的な食物アレルギーや花粉症などはⅠ型に分類されます。（表 1 参照）
- Ⅰ型はアレルゲンが体内に入って比較的短時間（直後～2 時間以内）で症状が現れます。

■表1. アレルギー反応の分類（Gell and Coombs）

アレルギーの分類	名称・同義語	例
Ⅰ型	アナフィラキシー型	アナフィラキシー、気管支喘息、アレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎、アトピー性皮膚炎、食物アレルギー、薬物アレルギー、急性蕁麻疹
Ⅱ型	細胞障害型 細胞融解型	血液型不適合輸血、自己免疫性血液疾患、Goodpasture 症候群
Ⅲ型	免疫複合体型 アルサス型	アルサス反応、血清病、SLE、薬物アレルギー
Ⅳ型	細胞性免疫、遅延型 ツベルクリン型	ツベルクリン反応、接触性皮膚炎、細菌、真菌、ウィルスアレルギー、同種移植片拒絶反応、薬物アレルギー

## ■アレルギー疾患について

- 日本の「アレルギー疾患対策基本法」にも定められている代表的な6つの疾患(気管支ぜん息、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎、花粉症、食物アレルギー、アレルギー性結膜炎、その他)は概ねI型に分類されています。
- このI型アレルギーは「IgE抗体」という免疫物質が関係しており、アレルゲンに対してそれぞれ固有の「IgE抗体」が作られます。この抗体を調べることで何に対してアレルギー反応が起きているかを調べることができます。

## ■アレルギー検査について

アレルギー反応を起こすアレルゲンを調べるいくつかの検査があります。



■表2. アレルギー検査の種類

検査の種類	検査内容など
特異的IgE抗体検査	血中にアレルゲンの抗体物質があるか調べる方法です。症状がなくても検出されることがあります。
皮膚プリックテスト	皮膚にアレルゲンが含まれるエキスを少量滴下して、専用の針で皮膚に刺してアレルギー反応を調べる検査です。抗体の有無を直接証明できる検査ではありませんが、アレルゲンへの反応について15～20分で判定することができます。
パッチテスト	この検査は特に金属アレルギーなどの接触皮膚炎が分類されるIV型アレルギーがあるかどうかを調べるための検査です。判定は48時間、72時間あるいは96時間後、1週間後に行います。
その他	喘息では呼吸の状態を評価するための呼吸機能検査や呼気中一酸化窒素濃度(FeNO)検査、食物アレルギーでは食物経口負荷試験、アレルギー性鼻炎では誘発テストなどの検査があります。

## ■アレルギー疾患の治療について

アレルギー疾患の治療は大きく分けて「症状に対する治療」「炎症を抑える治療」「免疫療法」の3つがあります。



■表3. アレルギー治療について

治療の種類	治療内容
症状に対する治療	アレルギー性鼻炎では鼻水やくしゃみに対して抗ヒスタミン薬などが使用され、喘息発作には気管支拡張剤が使われます。また、アナフィラキシーのような重篤な症状の場合はアドレナリン自己注射薬が使用されます。
炎症を抑える治療	アレルギー反応の一部は炎症を引き起こします。その炎症を抑えるためにステロイドと呼ばれる副腎皮質ホルモンの薬が使われます。
免疫療法 (アレルゲン免疫療法)	アレルゲンをごく少量ずつ投与することで、アレルゲンに対して体が反応しないようにするための治療です。定期的、長期にわたって継続的な治療を要しますが、アレルギーの治療法の中では根治(治癒)を目指す唯一の治療とされています。

アレルギーの原因がダニやホコリなどの場合、こまめに環境整備を行うことでアレルゲンの吸入の回避が期待できます。あまり神経質になる必要はありませんがこまめな掃除で快適な環境を作ることができます。